

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



格納庫のスケールの大きさと飛行機の存在感にびっくり(詳細は6面参照)

巻頭特集

がん研究の志 高校生8人に

慶應大学医学部長によるがん研究特別セミナー 2・3

座談会

「多様な力 測る入試に」私立中高一貫校 3校長 4・5

学校×企業

お茶の水女子大付属中×JAL 文華女子中×近畿日本ツーリスト
和光高×読売新聞 三鷹市立四中×日本生命 鷗友学園×読売新聞 6~8

ヨミウリ・ジュニア・プレス30周年記念イベント 9 第23回読売NIEセミナー 10

お知らせ・短信 11 リレーエッセー「海外で学ぶ」 12

2015.3

Vol.3

がん研究の志

慶應義塾大学 医学部長講義

高校生 8人

「なぜ、がん細胞は死なないのか」——。分子レベルでがんを研究してきた末松 誠・慶應義塾大学医学部長が3月21日、医学を志す読売教育ネットワーク参加高校の生徒8人を対象に、がん研究の特別セミナーを同大医学部（東京都新宿区）で行った。



生徒たちに大型質量分析顕微鏡について説明する末松医学部長

2017年に創立100年を迎える同大医学部。その信濃町キャンパス総合医科学研究棟の一室に、8人の高校生が集まった。期待と不安が交錯するなか、開始15分前に末松学部長が現れ、いきなり「みんな僕についてきて」と研究室に案内した。「がん患部の中には何万個ものタンパク質、代謝物が混ざっている。タンパク質の重さはそれぞれ異なるから、それぞれ体重測定をすれば、どの分子が病気に関係しているか分かると思わないかい？」

一人ひとりに問いかけ、具体例を示す「末松流」に、生徒たちの緊張が解けていく。日本に3台しかない巨大なイメージング質量分析顕微鏡の前では、がん細胞にレーザー光線を当て、最大300の分子を一度に分析できることを解説。がん細胞を格納する顕微鏡内部も自ら見せ、その原理を説明した。教室に戻ると、いよいよ講義だ。医学部2年生レベルの教材

ここが一步を踏み出した場所

福島県立会津高校2年

日ごろ触れることのできない分子レベルのがん研究を学べた。細胞のサンプルをイオン化し、すべてバラバラに分離する質量分析顕微鏡を実際に見て、原理も直接教えてもらうこともできた。白衣式で講演した医師は「居心地のいい場所から一步踏み出そう」と話していた。セミナーを振り返ると、ああ一步踏み出せたんだ、ここが一步を踏み出した場所なんだと自信を持てる。視野を広げ、内科医を目指したい。

医師に必要な資質の原点を見た

千葉県・市川高校2年

「何でも勉強して、どんどん知識を取り入れよう」という末松学部長のメッセージ。高校の研究が思うように進まないことがあるが、この言葉を忘れずにやっていきたい。白衣式では、医学部新5年生の姿を、将来の自分に重ねてみた。臨床実習に進む心構え、誓いの言葉が印象に残っている。医師になる者には、どのような資質が必要なのか。原点を見たような気がした。

コミュニケーションの大切さ、学べた

千葉県立千葉高校2年

末松学部長はタンパク質の構造が変わらないように分子レベルでクギを刺すことが治療、投薬だと説明した。がん増殖に置き換えれば、増殖は構造変化であって、増殖を抑制する「クギ」が抗がん剤。とても分かりやすかった。臨床医を目指しているが、研究と臨床、創薬がつながっていることが初めて分かった。患者さんとのコミュニケーションが大事だということも学べた。その力をつけることが私の課題だ。

医師の倫理観 想像より重い

東京都・鴨友学園女子高校1年

医師に求められる倫理観は私が想像していたより、はるかに重く感じた。常に背筋をピンと伸ばしてないといけない、そんな仕事なのかもしれない。私は周産期医療に関心がある。命を授かる喜びを分かち合える反面、シビアな場面もあるはず。だからこそ、色々考えさせられた。末松学部長に「将来は君たちに託す」と言われたのにはグッときた。「絶対に臨床」と考えていたが、研究という道もあることが分かった。

を渡し、「さあ、がん細胞が死なない仕組み。始めるよ」。

がん細胞の死なない仕組み説明

まず、披露したのは1983年から8年間務めた消化器内科医の経験。当時、CT検査や血液検査でも診断のつかないケースが一定割合あったと明かす一方、「現在はゲノム（遺伝情報）を調べて病気を突きとめる道が開けている」と声を強めた。抗がん剤の場合、その成分の分子が、どのようにがん細胞のタンパク質と結合し、作用するのか。分子構造を可視化することにより、がん増殖の制御が可能になりつつあると解説した。また、自らのがん研究については、「分子の釣り」と例えてみせた。

まず、がん細胞が赤血球に存在する有機化合物ヘムを使って増殖する点に着目したとし、「簡単に言えば、ヘムが釣りえさ。がん細胞の中に投げ入れて、ヘムと結合するタンパク質を釣るんだ。その結果、結合するタンパク質を一つ特定できた」さらに詳しく調べたところ、ヘムと結合したタンパク質が引き金となり、がん増殖シグナルが発信されていることを突きとめたという。「タンパク質の構

造が変わるとシグナルを出すので、構造を固定するような物質があれば、増殖を止められるかもしれない」と一気に話した。目を輝かせ、うなづく生徒たち。だが、現実には楽観できないとクギを刺した。「こうした研究は世界に何千種類もあって、どれが最も重要なメカニズムなのか分かっていない」と指摘し、「がんは、しぶとい。そう簡単には死なない」と強調する。なぜか。血管を塞いでがん細胞への酸素供給を止めても、がんは自らゲノムを変えて環境に適応することを示し、「最初は効果のあった抗がん剤が、効かなくなっていくのも、がんが巧妙にサイバールするから」と話した。

「がん克服は若い君たちに託す」

4月に日本医療研究開発機構初代理事長に就任する予定の末松学部長は「がんだけをやってけるのは非常に難しいが、不可能ではない。これからは君らの活躍次第。若い君たちに託す」と締めくくった。

生徒たちの質問にも丁寧に答えた。なぜ抗がん剤の流通が外国と比べて少ないかを問われると「日本では優れた抗がん剤が開発されている。でも、外国企



新5年生の背中が大きく見えた

東京都・渋谷教育学園渋谷高校1年

質量分析の事前課題は難しく、すぐには理解できなかった。でも、講義を受けたことで、タンパク質の質量分析が、がん治療に役立つことを学べた。科学にとってコンピューターの進化が大切なことも理解でき、良い体験となった。白衣式では、臨床実習に進む医学部新5年生の背中が大きく見えた。私は途上国で人を支えるような仕事をしたい。エボラ熱の最前線行きを志願した有井麻矢医師は、すごいと思った。

求められる覚悟 白衣式で学んだ

東京都立西高校2年

「いのちと向き合い、私は何ができるだろう——」自らへの問いかけから始まる医学部新5年生の誓いの言葉が心に響いた。これは、「どんな困難があろうと、患者さんのために何かをやらねばいけない」という、医師に求められる覚悟、医師としての姿勢だと感じた。日本には、医師のいない地域が今でもたくさんある。白衣を着られるようになり、無医村で医師として働きたいと強く感じた。

参加生徒たちの声

臨床の重みを感じた

桐蔭学園中等教育学校5年II高校2年

講義を受け、医師になるために大学で何を学び、研究するのがイメージできた。「無駄なことを学ぶのが大切」という末松学部長のメッセージは、裏返せば「勉強して無駄になることはない」ということ。重みのある言葉だ。研究医になりたいと考えているが、白衣式では「ベッドサイドで15分患者に寄り添うことは、机の上で3時間勉強するより得るものがある」と引用する医師がいた。臨床の重みも感じている。

未踏の分野への挑戦は魅力的

愛知県・海陽中等教育学校4年II高校1年

がん研究を「分子の釣り」に例えるなど、がん克服に向けた取り組みを流れとして理解できた。それに、スーパーコンピューターを活用した抗がん剤研究は僕にとって発見だった。ただ、板書のない講義は常に問いかけられている気がし、思考をフル回転させる必要があった。臨床医になりたいという目標は変わらないが、基礎研究で、誰も踏み入れたことのない分野に挑戦することは、とても魅力的に思えた。

多様な力 測る入試に

大学入試改革 私立中高一貫 3校長座談会



司会 森上 展安氏

「新テストは早ければ、現在の小学6年生が対象となる。答申をどう読むか。」

宮崎 グローバル化する社会の中で、今の子どもは多くは、まだ見ぬ新しい職業に就くと言われる。未知の社会に立ち向かうには「知識の暗記・再生」だけでなく、「思考力、判断力、表現力」を身に付けなければいけない。そういう方向性は間違っていない。

吉野 本校は、互いを認め合いながらも異なる意見が言える人間関係作りを力を入れてきた。

文・理の壁なくそう



鷗友学園女子中学高等学校 校長 吉野 明氏
一橋大社会学部卒。鷗友学園女子中・高で社会科・公民科の教諭となり、2003年から同校教頭、13年より現職。64歳。

多面的な力を測ろうとする答申の方針は、まさにこれらの延長線上にあると考える。ただ、いたる所で不安を感じる。大学の多くは、多様な評価を行う仕組みも準備も全然整っていない。また、1年に何度も新テストを繰り返せば、部活動や学校行事の時間はどうなるのか。具体策が見えないと保護者や生徒の不安は膨らむばかりだ。

梶取 入試改革は必要だが、問題は何をどう評価するかだ。「とにかく生徒を集めよう」ではなく、「大学それぞれが「こういう生徒が欲しい」と明確な基準を

示してほしい。基準がそれぞれ異なれば、偏差値などの一律な物差しは必要ない。

宮崎 生徒の評価が表面的になる恐れはある。国や大学がそこにどれだけ人とお金をかけるのか。実現に向けた具体策の難しさは答申した側も分かっているはず。答申をきっかけに、英知を集め取り組みたい。

現場からの要望は

吉野 文系、理系の枠を取り払えないだろうか。例えば、医者、数学や物理が得意な子より、人間が好きで子になってほしい。文系で学んできた子が高3で医者を志しても、受験できない状況がある。これをやりたいと気が付いたときに、自由に枠を超えられる入試制度であってほしい。

梶取 私も文系、理系はなくした方がいいと思う。うちでは中3で卒業論文を書かせる。社会科の課題だが、テーマは多岐にわたる。1年かけて仕上げ、発表する。入試では論文作成のような課題解決能力も評価してもらえたい。

宮崎 女子は男子より活発なのだが、数学の面白い講座に誘ってもなかなか来ない。米国のマサチューセッツ工科大学などの男女比は半々に近いのに。日本

■学力評価のための新たなテストの概要(中央教育審議会の答申より作成)

名称(仮称)	高等学校基礎学力テスト	大学入学希望者学力評価テスト
目的	高校における基礎的な学習達成度の把握。学校での指導改善のほか、進学、就職時に結果を用いることも可能とする。	大学教育を受けるのに必要な能力の把握。知識の活用や、自ら課題を発見し、解決するのに必要な思考力・判断力・表現力などを中心に評価する。
受験対象	高校生個人や学校単位での希望参加型。	誰もが受験可能にする。
出題内容	当初は、国語や数学などの高校の必修科目ごとの出題。	教科型に加え、教科・科目の枠を超える「合教科型」「総合型」の問題も出題。
解答方式	マークシート(選択式)が原則。記述方式の導入を目指す。	マークシート(選択式)だけでなく、記述式を導入する。
評価方法	成績は1点刻みではなく、段階別で表示。学校・生徒には正答率なども併せて提示する。	各大学の個別入試で多様な評価を促すため、成績は段階別で大学に提供する。
回数や時期	在学中に複数回(例えば高校2、3年時に年2回程度)。	年複数回実施。回数や時期は高校・大学関係者を含めて協議。

は「文系だから、理系だから」「男だから、女だから」にまだ縛られている。大学と高校で同時に授業を改革しなければならぬ。

「思考力、判断力、表現力」を育む取り組みは

宮崎 本校はリベラルアーツを掲げ、少人数・個別教育に力を入れていく。例えば、スーパーサイエンスハイスクール(SSHS)の指定を受け、通常より多数の先生を生徒の課題研究を見るために投入している。そのため、物理などの教科でも少数指導が行える。一方、文系の生徒にもゼミ形式の少人数講座を設けようと考えている。生徒を半数に分け、隔週受講にすれば十数人で学べる。主体的に選べる学びの場を幾つも提供しようと、今動いている。

生徒の意欲生かす



市川中学校・高等学校 校長 宮崎 章氏
立教大大学院文学研究科博士後期課程修了。筑波大付属駒場中・高の社会科・日本史教諭、副校長を経て、2014年より現職。62歳。

梶取 従来の学習がすべて悪いわけではない。暗記を含めた基礎力は大切だ。ただ、「これをやる」と頭が良くなる」というパッケージ教育はやりたくない。本物に触れさせることが大事だ。例えば中1の地学で、鉱物の薄片作りをやる。映像で見せれば短時間で終わる。それを何時間もかけて根気よくひたすら研磨させる。山梨県の清里での天文実習も本物に触れさせる教育の一環だ。星が見えたときの感動は言葉では表せない。無駄なことの中に大切なことがある。色々種をまいて、結果として何かに引っかけられてくれればいい。

吉野 女子は小さいグループに分かれてしまいがちだ。最初に人間関係を作ってお互いを認め合わないと、健全な競争が生まれないことがある。だから、中1

だけ、ほかの学年より10人ほど少ないクラス編成にし3日に1回席替えをする。どの子とも話したことがあれば、相手を思いやる会話が出来るようになる。大学や社会へ出ても伸びていく。

私立中高一貫校に期待される役割は

梶取 音楽でもそうだが、テクニクだけを学ぶと、その後は伸びない。「何をしたい」を6年間かけてどう育てられるかだ。どの科目でも「何をしたい」があつて初めて、学ぶ意味がある。子どもたちが自分でつかみ取りたいと思う種を多くまきたい。

宮崎 留学相談などに来る生徒

本物から学ぶ重要



武蔵高等学校中学校 校長 梶取 弘昌氏
東京芸大音楽科卒。武蔵高中の芸術科非常勤講師、1988年に専任教諭となり、教頭、校長代行を経て、2011年より現職。62歳。

は多く、意欲がすごく伝わってくる。生徒は授業の枠を超え、どんどんチャレンジする場を求めている。我々も多くの選択肢を作っていきたい。

吉野 国から一律に言われる国公立と異なり、建学の精神にのっとり、様々な取り組みを

行えるのが私学の良さだ。改革が、学力偏重の悪しき風潮をなくし、学校での多様な取り組みを評価するきっかけになってほしい。

(本記事は2月28日付読売新聞朝刊掲載記事の再録です)

じっくり選抜 可能に

答申について、大学入試制度に詳しい北星学園大の佐々木隆生教授に聞いた。

答申の本質は、入試制度そのものではなく、高校と大学の教育内容を一体的に改革しようとする点だ。高校生の学力把握はこれまで大学入試に依存していたが、入試問題は受験者を序列化し、定員まで振り落とす「選抜」に偏っていた。高校での学習達成度を測るには、ふさわしくない。学力を把握する「高等学校基礎学力テスト」(仮称)が導入されれば、選抜は、面接や論文などでじっくり評価する米国型が可能となる。

これまででも思考力・判断力・表現力が必要とは言われていたが、中学・高校の授業は、選抜テストを意識した知識注入型の教科教育が主流にならざるを得なかった。今回の改革では、学習指導要領の見直しで思考力などを育成すると同時に、選抜に使う「大学入学希望者学力評価テスト」(同)で、それらを評価することが示された。授業と入試の同時改革を目指している。

ただ、課題は多い。授業や作問、評価の研究はどこまで進んでいるのか。数十万人の受験生に、記述式を含むテストを年複数回も一律に課すのか。学校現場も批判に終始せず、具体的な提言を行っていく必要がある。

JAL工場見学

お茶の水女子大付属中学校



パイロットや客室乗務員のイベント用制服を着て記念撮影

展示エリアのcockピットで、機器の説明を受ける生徒たち



飛行機学習で感動体験

お茶の水女子大学付属中学校（真島秀行校長、生徒数362人）は3月4日、羽田空港で校外学習を行った。3年生の男女38人が、日本航空の「JAL工場見学」SKY MUSEUMに参加し、飛行機の魅力をたっぷり味わった。

展示エリアには、飛行機の縦席やタイヤ、エンジン、整備道具、客席などがズラリ。生徒たちは操縦かんを握ったり、機長や客室乗務員の制服を着たりして、写真を撮り合った。

航空教室で講師を務めたのは、日本航空広報部の阿部泰典担当部長。飛行機が飛ぶしくみについて、翼の上を通る空気の流れが下の流れより速くなるため、「圧力の差で浮く力が出てくる」と説明した。ジェットエンジンの噴射の様子を紹介する映像を見せると、あまりの迫力に生徒から思わず「わっ！」と驚きの声が出た。

続いて訪れたのは格納庫。東京ドームのグラウンドより広い空間に並ぶ大型機の圧倒的な存在感や、目の前の滑走路から飛び立つ旅客機の迫力に目を奪わ

れていた。
質疑も活発に行われた。

女子生徒 今使われている飛行機が一番古いのは？

阿部さん 20年を少し超えるくらい。飛行機は整備をすれば、いつまでも飛べるけど、古いほど整備に時間とコストがかかります

男子生徒 燃料は灯油と似ているようですが、なぜガソリンを使わないのですか？

阿部さん 発火点など温度の違い。灯油と同じ性質のほうがハンドリングがしやすいです
男子生徒 航空業界で働いている人は大学でどの学部にいるのですか？

阿部さん パイロットは文学部出身の人もいます。どんな学部を出ても、適正がOKなら問題ありません――。

約2時間の学習を終え、生徒の間からは「ふだんは入れない飛行機の整備の現場に入ることができて、貴重な経験でした」「私も客室乗務員になって、世界に羽ばたきたい」といった感想が飛び出した。

飛行機に関する知識と経験をいっぱいにした生徒たちにとって、中学卒業前の思い出になったに違いない。

東京都西東京市の文華女子中等高等学校（富岡康夫校長、生徒数302人）で3月9日、中学1年生から3年生までの27人を対象に、近畿日本ツーリストの出前授業が行われた。

講師を務めたのは、立川支店の長沢希さん。長沢さんは、旅行会社では、個人の旅行者を対象としたものから、修学旅行やオリエンピックの選手たちなど団体の旅行者の移動手段や宿泊先を手配するものまで、様々なツアーを提供していることを紹介。

実際に、沖縄への修学旅行を担当したとき、出発の前日に台風が二つも発生したため、全ての子定を組み替えることになり、睡眠時間1〜2時間で5日間の旅程を乗り切った経験を披露した。長沢さんは「旅行から帰ってきて、お客様から『ありがとう』といってもらえるのが、この仕事の醍醐味」と話した。

後半は、3〜5人の6グループに分かれ、「海外から来たお客様をおもてなし！1泊2日の旅行プランをつくってみよう!!」のテーマでグループワークに挑戦した。

生徒たちは、パンフレットやガイドブックを見ながら、行きたいところにマーカーで印をつけたり、移動手段を調べたりしていた。最後に、6グループ

文華女子中学校 × 近畿日本ツーリスト

旅行プランを作ってみた



旅行プランを考えるグループにアドバイスする長沢さん(中央)

が、神社やプラネタリウムなどを観光するプランや、東京・原宿の竹下通りや渋谷のファッションビル「109」を巡るツアーなどの力作を発表した。中学3年の菊池麗七さんは「やりがいのある仕事だと思った。時間配分を考えるのが難しかったけれども、楽しんでもらえそうな場所と、自分も行きたいところを比較しながら考えるのが楽しかった」と話していた。

読売新聞

世論調査部長に

和光高校生徒 インタビュー

選挙権年齢を「18歳以上」に引き下げる公職選挙法改正案について、新聞社の意見を聞きたいと、私立和光高校（東京都町田市）の生徒2人が3月4日、読売新聞東京本社を訪れ、世論調査部長にインタビューを行った。

同高では卒業後の進路が決まった3年生が3学期、グループで自由なテーマに取り組む「自由研究」がある。星川陸さん（18）、山成真平さん（18）ら10人のグループは、昨年12月に行われた衆院選で若者の投票率が低かったことから、「18歳選挙権」をテーマに選定。甘利明・経済再生相や、20歳代の投票率向上を目指して活動する大学生団体などにもインタ

ビューを行ってきたという。

星川さんと山成さんは「若者の投票率を上げるには、どうすればよいか」などと質問。世田部長は「スマホやパソコンを通してあまりにも簡単に情報を入手できるようになった結果、情報過多になり、政治への関心が薄れているのではないかと分析した上で、「学校の中でしっかりと主権者教育を行っていくことが大切になる」と答えた。

インタビューを終え、星川さんは「情報過多が、政治につながる機会を減らしているという指摘は、新たな発見だった。いろいろな立場の人の意見を聞け、貴重な自由研究になった」と話した。

日本生命×

三鷹市立第四中学校

わたしの未来設計図



グループ討議に加わる日本生命の藤山さん(後方右)と河南さん(中央)

日本生命は3月10日、東京都三鷹市立第四中学校（秋山純子校長、生徒数347人）で、中学3年の生徒約120人を対象に「わたしの未来設計図」と

題した出前授業を行った。秋山校長の「卒業前に自分の将来を考える機会にしてほしい」との意向で実現した。

講師役は、日本生命CSR推進室の藤山富美恵室長と河南晴久課長補佐。河南さんは「保険は、みんなでお金を出し合い、困った人のために使う助け合いのしくみ」と説明。進学や子育て、老後などにかかる費用について、「一般的な家庭だと、合計で2億円ぐらいかかる」と話す。生徒からは「高い！」とため息が漏れた。

藤山さんは「いろんな選択肢を残せるよう、今をしつかり歩んでください」と激励。最後に秋山校長が「人生いろいろあります。置かれた立場で自分を輝かせるよう、それぞれの道を歩んでほしい」と呼びかけた。

女子生徒の一人は「将来のことを漠然と考えていたので、詳しく学べて良かった。教育にもお金がかかることを聞き、親に感謝したい」と話していた。

鷗友学園 × 読売新聞



熱く語る秋元記者と佐藤記者の周りに生徒たちが集まった

紛争写真で分析

本紙記者 出前授業

読売教育ネットワークの出前授業「写真が語る国際紛争」新聞協会賞記者が見たボスニア・コソボ紛争」が2月14日、東京都世田谷区の鷗友学園女子中学校（吉野明校長、生徒数1495人）で行われ、中学3年から高校2年の28人が参加した。講師は旧ユーゴスラビ

ア・コソボ紛争の写真報道で1999年に日本新聞協会賞を受賞した読売新聞東京本社の秋元和夫記者と、当時、国連欧州本部（ジュネーブ）で紛争を取材していた佐藤伸記者。

授業の教材は旧ユーゴと周辺国で秋元記者ら読売写真部員が撮影した写真で、民族対立に翻弄される市民の姿をテーマ別に分けた。生徒たちは1か月かけて国会図書館や新聞博物館などで写真の背景を調べ、八つのグループが発表した。

新井海聖さんら高校2年の4人は、サラエボ包囲網の写真をテーマに劇に仕立て、少女の心を通して戦争の理不尽さと民族対話の必要性を訴えた。

高校1年の三上あやのさんら4人は、倒されたセルビア王の像の上で遊ぶアルバニア系住民の子どもたちの写真に注目。世代を超えた悪意の連鎖を断つようにと訴えた。

発表後、秋元記者は国際紛争下の取材について、対立する勢力がそれぞれメディアを利用しようとする、と指摘。「1枚の写真だけで判断しては紛争を正しく捉えられない」と説明した。

ヨミウリ・ジュニア・プレス

30周年記念イベント開催

現役の小学生から高校生が実際に取材して、読売新聞の紙面やニュースサイト、ヨミウリ・オンラインに記事を書く「ヨミウリ・ジュニア・プレス（YJP）」の活動が始まって30年。よみうり大手町小ホールで3月18日、YJP創設30周年を記念するイベントが「グローバル社会を生きる」をテーマに開催された。

イベントでは、公益財団法人、国際文化フォーラムの水口景子事務局長による「今そこにあるグローバル」と題した基調講演、YJP出身で海外に留学した経験を持つ現役大学生5人によるパネルディスカッションが行われた。

水口さんは、講演で「グローバル、と言うと世界に出て行くことを考えるが、実際には日本国内でも、グローバル化を感じることができ」と発言。例として、新大久保や、池袋などの外国人の多い

街を画像で紹介しながら「新宿区内のある小学校は児童の6割が外国にルーツを持っている」と説明した。

また、黒人として初の南アフリカ大統領に就任し、アパルトヘイト（人種隔離政策）を撤廃に導いたネルソン・マデラ氏の「相手の理解する言葉で話せば、頭に届くが、相手の母国語で話せば心に響く」との、外国語を学ぶことの重要性を説いた言葉を紹介して「外国語は英語だけではなく」と複数言語の学習の大切さを訴えた。

パネルディスカッションに登壇したのは、スウェーデンに留学したお茶の水女子大4年の浦田雅子さん、ニュージーランドとフィンランドに留学した独協大3年の大内めぐみさん、イスラエルに留学した早稲田大4年の紺野雅子さん、中国に留学した国学院大4年の田村佳緒里さん、ス

ペインに留学した立教大4年の日高夏希さんの5人。

イスラエルのユダヤ人大学生の討論をジュニア・プレスの高校生として参加して中東問題に興味を持ち、ヘブライ大学（イスラエル）への留学を決めた紺野さんを始め、いずれの大学生もジュニア・プレス時代の取材をきっかけに興味を持った国や地域に留学先を決めた先輩ばかり。

「日本はモノが多く、情報があふれているが、その幸せを見逃していることを留学で学んだ。留学では自分と向き合う時間できる」（浦田さん）と留学を勧める言葉や、「日本の高校までに学んだ英語は受験を乗り越える学習だった。しかし、それよりも重要なことは、自分の考えを伝えていくことだ」（大内さん）など貴重な先輩たちからのメッセージに、現役のジュ

ニア・プレス記者たちやOB、OGら約200人は、熱心に聞き入っていた。

ヨミウリ・ジュニア・プレスのメンバーは毎年1月～2月、若干名の募集を行っている。作文と面接で選考している。現編集部には、小学生10

人、中学生19人、高校生31人の計60人が所属しているが、過去30年間で、OB、OGの数は600人近くになる。

問い合わせはヨミウリ・ジュニア・プレス編集部
☎03・3217・8245



ジュニア・プレスの先輩5人の語る留学体験に会場の200人が熱心に耳を傾けた（よみうり大手町小ホールで）



第23回 読売NIEセミナー

小中高校の先生向けに、指導要領に沿って新聞を活用した授業実践例を紹介し、実際にどう授業をするか考える「教科書と新聞」をテーマにした第23回読売NIE (Newspaper In Education) セミナーが2月28日、読売新聞東京本社で開かれた。

4月から新しくなる小学校の教科書には新聞にかかわる単元が数多く登場するため、新聞を授業で使うノウハウを体得しようとして、秋田、岩手、鹿児島など全国から集まった小中高の教員や教科書会社の編集者、大学生など91人が新聞活用授業例などに熱心に聞き入った。



熱気にあふれたNIEセミナー会場

まず松尾謙一郎・教科書協会事務局長が「教科書作りの舞台裏」と題して基調講演を行い、「新聞は教材の宝庫。空撮写真や最新グラフはとても重宝する」など、日ごろから新聞を読んでいる情報にアンテナを張っている教科書会社の姿に触れた。

続いて小中高校の先生方3人が、単元に基づいて行っている新聞活用授業の実践例を紹介。東京都北区立東十条小学校の山野辺愛子教諭は、東日本震災時に避難所で新聞を読む人の気持ちを考える小学5年・社会科単元での授業で、震災2日後の

のニュース番組だらけのテレビ番組欄を使用した例を紹介したほか、毎週1回行っている朝の「新聞タイム」で児童が新聞に親しんでいる学校全体での取り組みを説明した。

茨城県つくば市立谷田部東中学校の工藤一二三教諭（社会科）は、約10年前に掲載されたつくばエクスプレス開業時の紙面を比べた地理の授業実践例などを紹介。文明開化の時代に生まれた読売新聞の創刊号を使った歴史の授業例なども披露した。

埼玉県立川越女子高校の佐藤弥生教諭（国語科）は、新聞スクラップノートを生徒に作らせて深めている小論文学習を紹介。入試のためだけでなく、答

えのない問題を考え、メディアリテラシーの力がついている生徒の実情に触れた。

実習では、鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナーが講師となり、参加者が6人程度のグループに分かれて読売、朝日、毎日、産経、東京の計5紙の朝刊を読み比べ、見出しや写真の扱い、主張の違いなどを比較した。

取り上げられた記事は「ウイリアム王子来日」「東京五輪」など。「川崎の中1殺害事件」を取り上げたグループからは、「新聞によって異なる視点で分析記事が書かれていることが分かった」との声があがるなど、会場は最後まで熱気に包まれた。

参加した先生からは、「早速あすから使える」「新聞活用学習が職員室でも話題になっていたので、タイムリーだった」の声が上がり、教科書編集担当からは、「広告やテレビ欄、写真など、さまざまな切り口から新聞活用授業ができるというのは目からうろこだった」と感心していた。

NIEセミナーは年に1〜2回程度開催されており、開催2か月前に紙面などで参加申込を受け付けている。

問い合わせはNIE事務局 ☎ 03・3217・1989



東日本大震災での対応を紹介する富士通の濱田さん



金融教育の重要性を訴える野村ホールディングスの田中さん

第6回読売中学受験サポートセミナー

学校関係者ら 40 人が出前授業聴講

読売新聞の受験情報サイト「中学受験サポート（会員校 64 校）」の関係者ら約 40 人を招いた第 6 回セミナーが 2 月 24 日、読売新聞東京本社で開かれ、読売教育ネットワークに参加する富士通と野村ホールディングスの担当者が高校生向け「出前授業」を披露しました。

富士通は CSR 推進室の濱田真輔室長が、東日本大震災に際して同社が被災地で実施した復旧作業やインフラ整備について紹介。パソコン製造の影響を最小限に食いとどめるためにとった方策についても説明しました。

野村ホールディングス・コーポレート・シティズンシップ推進室の田中修・金融リテラシー推進課長は、将来設計や資産形成について若い頃から考える金融教育の重要性を訴えた。投資についてマイナスイメージを持つ人も多いが、「投資リスクを技術によって低減できることを知らないまま引いているのはもったいない」と話していました。

実際に模擬授業を聞いた学校からは強い関心が寄せられ、会員校の一つ玉川学園高校で 4 月 10 日に野村 HD の金融教室が開催されることが決まりました。

調べる学習コンクール 入賞作品決定

「第 18 回図書館を使った調べる学習コンクール」（公益財団法人・図書館振興財団主催、読売新聞社、活字文化推進会議など後援）の表彰式が 2 月 28 日、東京都内で行われました。応募総数 5 万 7070 点の中から入賞した 32 作品が文部科学大臣賞などを受けました。このほか、地域コンクールの活動が評価された 3 団体が表彰されました。

審査委員長を務めた銭谷真美・東京国立博物館長は総評で「受賞作品はコンクールの趣旨である図書館やフィールドで調べた作品が多かった。図書館を活用して豊かな人生、心豊かな生活が送れるよう努めていきたい」と述べました。

文部科学大臣賞を受賞した東京都墨田区立曳舟（ひきふね）小 3 年田口文喜（みはる）さんは「大変だったのは自分の考えをまとめて文にすること。調べるのを手伝ってくれたみんなにありがとうと言いたい」と話していました。

◎田口さん以外の文部科学大臣賞受賞者は次の通り。

- | | | |
|---------------|-----|------------------|
| 東京都 文京区立湯島小 | 2 年 | 志太証さん |
| 千葉県 袖ヶ浦市立奈良輪小 | 5 年 | 小滝遥斗さん・重城大翔さん |
| 石川県 金沢大付属中 | 1 年 | 關（せき）まこさん |
| 東京都 渋谷教育学園渋谷高 | 2 年 | 武田りほさん |
| 千葉県 袖ヶ浦市 | | 読書指導員 中村千秋さん（59） |

日本語検定申し込み受付中

日本語の総合的な運用能力を測る日本語検定（特定非営利活動法人日本語検定委員会主催、読売新聞社特別協賛、時事通信社、東京書籍協賛、文部科学省、日本商工会議所など後援）の次回検定試験が 6 月 13 日に実施されます。検定は年 2 回実施され、1 級～7 級の取得を目指し、小学生から社会人まで 8 万人以上が受検しています。日本語検定の級認定を入試時の加点や合否判定の優遇条件とする大学、専門学校は全国で 200 校にも上っています。

読売新聞専用の申込用紙を使えば、受検前に、過去問題 1 回分の検定問題と解答・解説の冊子がもらえます。締め切りは 5 月 15 日。読売新聞専用の申込用紙は、日本語検定委員会の専用ダイヤル（☎ 03・5390・7498）に電話し、「読売新聞を見た」と伝えれば郵送で届きます。読売教育ネットワーク（<http://kyoiku.yomiuri.co.jp>）からも申し込みます。

ジャパン・ニュース創刊 60 周年

4 月から紙面刷新

読売新聞が発行する英字日刊紙「ジャパン・ニュース」（JN）が 4 月 1 日に創刊 60 周年を迎えるのに合わせて紙面をパワーアップします。

◎日本の国内外で起きた重要な出来事の内幕に迫るコラム「Behind the Scenes」を新設。日英対訳で好評の社説は 4 面に固定し、本紙解説記事、調査研究本部の研究員による論文、中央公論新社発行の素材など日本発の論評を広く、深く伝えます。

◎「食」のページ「Delicious」面を火曜日に新設、料理の簡単レシピ、歴史や秘話、海外の人に魅力を伝えられるコーナーを目指します。

◎記事中の重要な用語にはクリップマークをつけて説明するほか、1 面の上部に注目のニュースが一目でわかる「主なニュース」欄も新設します。

◎毎週日曜日付けの紙面では、古都の小道から話題の観光スポットまで日本の魅力を伝える観光面「Detours in Japan」（寄り道）がスタートします。

◎英語学習に役立つ語学学習面「JN Learning Lab」が木曜日付けから金曜日付けに移動。1 週間のニュースの中からえりすぐりの英文記事紹介、和訳・英訳コンテスト、本紙「編集手帳」の日英対訳のコーナーはそのままです。

JN の購読申し込みはフリーダイヤル ☎ 0120・431・159 へ。携帯電話（通話料がかかります）の場合は ☎ 03・3216・8866 へ。

海外で学ぶ・リレーエッセー ③

スミス大学で 「世界に貢献できる女性」に

広島三育学院高校卒・スミス大学3年

坂井すずさん



「ハーイ、名前はスズ。3年生で、舞台芸術専攻、建築副専攻です」

自己紹介のときは反応を見るのがわくわくする。特に舞台芸術専攻です、と言う瞬間は。リベラルアーツの単科女子大に舞台芸術専攻の学生がそれほどいるわけではない。アジア出身の友達も多くは経済専攻、コンピュータ科学専攻、あるいは

工学専攻だ。(スミス大は工学の専攻課程と学位のある米国唯一の女子大だ)

スミス大に入学したのは国際関係論を学びたかったし、心理学に興味を持っていたからだ。でも、コスチューム・デザイン講座の履修後、本当にやりたかったのはデザインだと悟り、舞台芸術の専攻を決めた。今学期、私は舞台照明をデザインし



坂井すずさん(坂井さん提供)



て、教授の衣装製作も手伝っている。この間ずっと、美術史、建築、仏教学、中国語を学んでいる。

とはいえ、他のリベラルアーツの単科大でも多かれ少なかれ、同じようなことはできるだろう。女子大が特別なのは、女性のための機会を与えてくれることだ。学生全員が女性という環境では、女性の機会が増えることを意味する。キャンパスで様々な役割を見いだすことができ、リーダーとして力を存分に発揮できる。共感して尊敬できる、なりたいと思う女性のお手本が身近にいるのである。す

べてが私たち女性の要求を満たしてくれるという状況は、(一般的に言って)どんな社会でも男性が依然として優位である中で、独特だ。この大学に来るまで、こんなことは考える機会もなかった。

こうした環境に3年もいると、聡明な同性たちと出会える。彼女たちは、何事にも情熱的に取り組めるよう私を後押しし、心身ともにコントロールできるようにさせてくれる。専攻分野に関係なく、「私は21世紀の女性なの」と感じさせてくれる。女性であることは素晴らしいことだと感じさせてくれる。

それがスミス大だ。そして、この思いは、教室や女子大という枠組みを超え、社会に出ても、「世界に貢献できる女性」になるために、ずっと抱き続けられるはずだ。

(会報編集部抄
訳 The Japan News 2014年11月6日)

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロウシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロウシップの詳細はウェブサイト (<http://ryu-fellow.org>) へ。

英語の原文は<http://the-japan-news.com/news/article/0002036878>で4月いっぱいお読みいただけます。

The Japan News
by The Yomiuri Shimbun

ジャパン・ニュース創刊60周年

4月
紙面刷新

読売新聞が発行する英字日刊紙「ジャパン・ニュース」(The Japan News = JN) が4月1日に創刊60周年を迎えるのに合わせて紙面をパワーアップします。詳細は11面参照。